

死線を越えて

宮城県 高橋 甚 熙

私は玉造郡の山村の農家の長男として生を享け長ずるに及んで農業に従事していました。昭和十三（一九三八）年徴兵検査の結果、甲種合格を言い渡されました。そして近衛歩第四連隊に入隊せよとの通知書を受け、昭和十三年十一月二十九日、村を挙げての歓呼の声に送られて、岩出山駅より征途にいたしました。そして十二月一日入隊、二期検閲も過ぎ、班長より下士官候補の試験を進められ合格しました。

翌年の七月、近衛師団の下士官候補者五十人が盛岡陸軍予備士官学校に入学、卒業後青山連隊にて初年兵教育を担当しました。十一月、部隊は南方方面に出動も間近になってきました。その中、下士官全員は教育隊に残留しましたが、その後三人で航空隊を受検し、二人が合格して所沢飛行学

校に入校しました。

そこでは十八、十九歳の少年達が練習機の操縦桿を握っているのに、軍曹が飛行機の油差しの日で苦勞の連続でした。程なくグライダー要員となったのですが指導員が即死したため、これは打ち切りとなり、その後落下傘部隊に編入されました。ここでの訓練は多摩川公園で行われ、ここには落下傘降下訓練塔もあって毎日日本格的な訓練が始まりました。そして再度所沢の飛行学校に戻ったのが昭和十六年の末でした。

翌昭和十七年一月一日、夜十二時、非常呼集の合図で完全武装をして営庭に整列し、三十台のトラックで品川駅へ行き、休憩の後列車に分乗し、窓を開けるのを禁じられた列車輸送で下関港に着しました。ここでは輸送船の関係でいったん民宿に宿泊、ようやく昭和十七年一月十五日午後十時に小学校校庭に集合、真暗な中、栈橋を渡り船上の人となりました。誰が歌い出したのか「ああ堂々の輸送船」の歌が聞こえました。

程なく夏の衣服が支給されましたので、これは南方行だなあと感じました。一日、二日は異状なし、三日目に入ると前方に陸が見え台湾の高雄港に入港しました。高雄には弟が中学校の先生としていたのですが通信の手段もなく、連絡もとれないうままとなりました。

二十三日の夜、船団四隻が航行を開始し、四日目の早朝に突然爆発音がして、一番船が水煙を上げ、次第に傾き沈み始めました。助かった兵隊は三分の一ぐらいとのことで、それを見て、誰もが沈黙のままの夜を過しました。

そのうちに船の機関音も静かになり、波も穏やかになり、どこかの島か湾に入ったことが分かり、皆で肩を叩き合って無事の到着を喜び合いました。上官よりここは仏印のカムラン湾で、我が方の南方基地であり、ここにはフランス軍があり敵前上陸を行うことなるので準備せよとの命令がありました。陸用舟艇で上陸するので準備せよとの命令がありました。

翌朝、まず敵状偵察の合図で上陸を開始しました。そしてこれは昭和十七年一月三十一日のことで、その日より三日で移動を開始サイゴンから汽車で二月三日の朝、次の居留地プノンペン駅に到着、全員が下車し駅前の大きな建物の一階に宿営しました。そして翌日よりマレー半島を進み、通過したシンゴラ、ユタバルは一週間ほど前の激戦地で、苦闘の跡が生々しく残っておりました。

作戦は「昭和十七年二月十四日、ジョホール北側のカハン飛行場を午前十一時に出発、第一隊は精油所を確保、第二隊はパレンバン飛行場を占領すべし」とのことで南方方面軍最高指揮官よりの訓示を受けました。

当日は天気良好、視界も広く絶好の攻撃日でした。そして命令通り十時に集合し、点呼、武装検査、隊長の訓辞、はるか祖国に向い君が代合唱、各分隊ごとに搭乗を開始しました。そして十一時、全員「ボー（帽子）を振れ」の合図に一機ずつ離陸、上空を旋回します。誰も話すことなく、皆固

唾をのんでお互いの顔を見つめ合っているだけでした。程なく大きな市街地が見え、ハッキリ飛行場の滑走路が確認出来ました。

この時分隊長の「下降準備！」で私は二番索引網を機上部の鉄索に取り付け、機のドアが開き、「下降！」の命令で素早く飛び降りました。

下降を終えて、攻撃態勢をとり始めると、周囲の高射砲部隊も一斉に火を噴き始め、戦争の凄まじさを実感させられました。落下傘は空中では無事聞きました。降下地点のゴム林に絡まり、宙吊りになりましたので装着金具を外し下に飛び降りました。周りには誰もいなく、一人で不安ながらもまず銃梱包を見つけようと拳銃を片手にいくら戦友を呼んでも答えがありません。

平地に出た所の大木の下に人らしい姿を見かけたので拳銃を構えて進むと「おい！俺だと」手を挙げたのは部隊長の甲村中佐でした。部隊長は「本部の兵隊に会ったら伝えてくれ、ここにいますから」といいますので、私はその場を離れました。その

うち三十人ぐらいの本部の兵が一緒になっておりましたので部隊長の居場所を伝えました。

滑走路にも人影もないので、建物に射撃をする

と敵はこの徴発に乗って出て来るだろうと思つたのですが、敵は高射砲を向けて来ました。小高い所から「早く下れ」と命令されましたので三十メートルほど後退して窪地に伏せましたが、見ますと先ほどいた所の切り株が跡形もなくなっていました。皆によくも負傷しなかったと言われました。

その時の戦で小隊長奥本中尉は足を負傷し軍刀も半分に折れました。

このまま真正面から攻撃するのは不利と考え、日暮を待つて夜襲戦を敢行することになり、日暮までと休息していますと、歩哨が「町より数台のトラックがこちらに向かつて来る」との情報があり、この敵を飛行場に入れては不利になると、直ちに配置に付けの命令が出され、我が分隊十人は軽機を持って道路の向い側のゴム林に待機しました。

「打て、の命令があるまでは絶対撃ってはならない」との命令でした。そして三十メートル近くの銃口すぐ前に大きな声が聞こえましたので無我夢中で引き金を引きますと先頭の車のフロントガラスに命中、車は右の側溝に落ち、後続車がそれに追突し、車の下敷きになる者、投げ出される者、血まみれになる者など阿鼻叫喚とはこのことかと思ふ有様でした。しかし後続車より敵兵がどんどん降り、私達に乱射を始め、あつという間に四方より囲まれました。

道路の向い側より戦友がこっちに帰れと言われましたが、ただ一人として向い側に行けません。軽機一人ほかは皆三八式小銃のみ敵は三十発出る自動小銃、動く狙い撃ちにされます。そのうち弾が無くなったので後の弾囊へ左手を回した途端に、全身をハンマーで殴られたように感じ、思わず側溝に落ちました。

痛くないが身体が重く、どこかを撃たれたと思ふ左手を着いて起きようとしますと肩の付け根か

ら折れたようで全然動きません。右手で左手を押さえて見ても動かない。すると山本分隊長から「退れ！」と言われましたが、動く撃たれるのでじつとしていますと分隊長がこちらへ走つてこようとしたので「来るな、早く戻れ」と言つたのですが聞かず、私を抱き上げようとします。

これを敵は見逃す訳がない。分隊長は私の身体に覆い重なってきましたので分隊長と呼んだが返事がありません。やられたなと感じた瞬間、突然、上半身を起し両手を挙げて「天皇陛下万歳」と二回叫んで再び私の上に倒れてきました。私は悔しくて涙が流れ声も出ません。

こうして何時間ぐらい経つたのか、私もぼんやり意識が戻り、途切れ途切れに思い出せるようになって周りも薄暗く、人影も分からなくなりました。そして何だか身体の上が重いのでよく見ると分隊長が私の上で息途絶えていました。

右手で分隊長をよけて腰を上げ、足を出して見ますと左腕以外はなんともありません。そこで立

ち上がるうとしますと顔がスーッととなりなぜだか呼吸が止まりそうになりますので横になつて考えてみますと出血多量のせいと考えました。仕方なく左手をズボンと一緒に腰のベルトに締めて動かないようにしましたが、いつまでここにいても仕方がないと、車の通らない時を見計らつて道路を越えようと思つていたところ後の方で時々咳をし唸るような声がきこえます。

あまり遠くない所ですので片手と膝で歩くようにして近づきますと兵隊が負傷して動けないでいます。「誰だー」と低い声でいうと「お前は誰だ」と言います。日本兵じゃないか、その声は大谷軍曹でした。「高橋か、よく生きていたなあ」と二人で何の言葉もなく涙を流して抱き合いました。そして軍曹を見ると下半身を撃たれているようでした。

「どこをやられた」と聞きますと「大腿部より弾が入り、急所を貫通された」、そして少し動くと頭がズーンとなり気が遠くなるとの事です。私は

「足だけは大丈夫だからジャングルに行つて友軍と連絡をとり、助けにくるから」と言いますと「高橋、俺を見捨てていくのか」と「俺はいつ死ぬか分からない、生きているうちは俺の側にいてくれ」といいます。そう言う私も当てもないジャングルを彷徨し出血多量で動けなくなるかも知れぬ、死ぬ時は一緒に話しあつた中でした。

そして「分隊長は」と聞かれたので、二度万歳を叫んで逝つたと話しますと分隊長は「そういう男で、部下思いの立派な軍人だったと」二人で涙ながらに語り合いました。

その後、ここは道路のすぐ下なので、より安全な場所に移動しようと見回しますと、三十メートル先の林の中に小屋が見えたので、あそこに行こうと大谷軍曹を片手で引つ張つたのです。動く頭がスーッとし、目が見えなくなるので、何時間か掛かってたどり着きました。

ふと後ろを振り返ると、敵兵が日本兵の戦死者を確認している様子でした。やがて私共の数メー

トルの所に近づいた時に大谷軍曹が拳銃を一発撃ちますと敵は自動小銃の一斉射撃です。生きた心地がしませんでした。小屋は蜂の巣のように弾丸の跡でした。幸い下には飛んできませんでした。

しかし今度は手榴弾の攻撃です。うち一個が私達の所に飛んできましたので、思わず足で蹴ってやるうとしましたら爆発し、強い衝撃を受け意識が遠くなりました。

どのくらい経ったのか体を揺さぶり耳元で私を呼んでいる声に目を覚ましますと、大谷軍曹の顔があり、生きているのだと二人で抱き合って泣きました。どこをやられたのか体中を撫でたり足を動かしますと膝を撃たれたのが分かり、大谷は「俺が悪かった」と拳銃の発砲を詫びるのでした。今度は少し動くと頭が空っぽになり、また無性に喉が渴き、腹へこでした。

何時ごろなのかそのうちにわか雨が降り出したので小屋からはい出し口を開けても雨水は顔を流れるだけで口にはほとんど入らず、何としても駄

目だなあと二人で泣き笑いでした。手足が駄目なので本当に運を天に委せる外ないのでした。

その内飛行機の離着の音が聞こえ、どちらの方向だろうと樹間より見ますと「日の丸」が見えましたがそのうち助けに来るだろうと二人で喜びました。そのうち二人には眠気との戦いだけでした。そのうち五、六人の兵隊が銃を携えて向ってくるのです。が味方が敵なのか分かりません。

さらに近づくとも兵隊の言葉は日本語なので「おい」と叫ぶと、びっくりして側溝に伏して銃を構えます。「おい高橋だ」「俺だ伊藤だ」と言っ

て走り寄って来ました。「大谷も一緒か皆心配しているぞ、助けるからな」との言葉に二人はただ言葉もなく泣いてしまいました。そして小屋のアンペラの上に私達を乗せて歩き出しますと町の方よりトラック二台が走って来ます。兵たちは私達を道路側に置き去りにして自分達だけ物陰に隠れ、トラックが通り過ぎると「やあやあ申し訳ない」と再び道を行きます。

飛行場にはまもなく到着し兵舎の前庭で軍医が応急手当をしてくれました。そして中隊長以下の励ましがあり、私は涙と鼻水だけの答えでした。高橋、顔がブチブチ腫れ上がっているがどうした。

「蚊や蛇に刺されたのも気付かなかったのだろう」といわれました。そして軍医と衛生兵により全部裸にしての負傷個所に仮手当てをしてみました。

現地五時、三人一緒に重爆機の中に横に寝かされシンガポールへ送られました。これまで長い軍隊生活でしたが、実際の戦争体験はこの僅か三日間でした。

立派な陸軍病院に入院、大谷軍曹は別室に、私と勝間田は同室でした。これが彼との生涯の別れになるうとは。大谷軍曹はシンガポールの病院から直ちに台湾の高尾陸軍病院東門分院に送られましたが、亡くなったとか。私達は一カ月後に、同じく東門分院に行ったのですが、その時の係より聞きました。

私の負傷は手足とも骨折なので硬いギブスがはめられ、一人で寝ることも出来ない状態で二カ月も置くと言われました。そのうち私達も内地送還のため病院よりサイゴンまで車で送られ、ここから病院船にて昭和十七年三月十九日、台湾陸軍病院東門分院に四十人の大部屋に入りました。

そして約三カ月ぶりに給与手当てが支給され、不自由だった日用品の購入ができました。また二カ月半ぶりにギブスを外され、入浴に連れて行かれ、すっかり清潔にして頂きましたが、手も足も全く曲らなくなり、翌日より看護兵二人でリハビリが始まりました。

このリハビリは敵弾に当たったより痛い毎日でした。約一カ月後の五月三日、基隆港を出発して門司港に上陸、小倉病院に入院、七月二十二日、宮崎県新田原病院に、その後、別府陸軍保養所に約五カ月間温泉療養をしました。

昭和十八年三月六日に現役及び予備役免除との命を受け、白衣姿のまま衛生兵に付き添われて列

車にて再び見ることのないと思っていた故郷、岩出山駅に到着、家族、親戚の人達に出迎えられました。ここで私服に着替え、白衣は衛生兵に預け、私の軍隊生活に終止符を告げたのでした。

一人でも兵隊の員数が必要な当時、兵役免除され廃人同様の身になりましたが、その後の生活にも苦労しました。すべて人手まかせなので大変でしたが、地域の皆様のご協力とそれにも増して戦地で亡くなられた戦友の今日があることを心より感謝の念でいっぱいです。

ミンダナオ島敗走記

滋賀県 堀池 栄 一

私は大正八（一九一九）年五月六日生れ、昭和十二（一九三七）年三月、滋賀県立八幡商業学校を卒業して同年三月に大阪の繊維商社に入社しました。

徴兵検査は昭和十四年に受け、昭和十五年一月に輜重兵第十六連隊第三中隊（自動車隊）に現役兵として入隊しました。昭和十五年五月、陸軍自動車学校に練習隊要員として分遣され、昭和十五年十二月に上等兵に進級、昭和十六年五月に陸軍自動車学校教育期間が満了しました。

臨時編成下令、十一月、大阪港出航、十二月、奄美大島寄港、十二月二十四日、フィリピン・ルソン島に上陸、昭和十七年七月まで比島輜重兵第十六連隊にありて大東亜戦争に従事、昭和十七年八月病気のために送還された。その間、部隊名は